

Glocal Tenri



月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.21 No.6 June 2020

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

6

CONTENTS

- ・ 巻頭言
別席とは
／永尾教昭 1
- ・ 2019 (令和元) 年度「教学と現代」より
「元の理」の生物学的アプローチ
／佐藤孝則 2
- ・ 日本語教育と海外伝道 (23)
歴史の中の留学生 ②
／大内泰夫 4
- ・ キルケゴールで読み解く 21 世紀 (21)
倫理学の学問的境位と不条理を前にした人間の自由
／金子 昭 5
- ・ 伝道と翻訳—受容と変容の“はざま”で—(23)
仏典翻訳の歴史とその変遷 ⑥
／成田道広 6
- ・ 遺跡からのメッセージ (58)
唐古・鍵遺跡の大型建物と豆谷和之さんの記憶
／桑原久男 7
- ・ コロンビアへの扉—ラテンアメリカの価値観
と教への伝播— (10)
5. コロンビアの体質 1
／清水直太郎 8
- ・ ニューヨーク通信 (5)
文化協会を支える人々 (2)
／福井陽一 9
- ・ ヴァチカン便り (44)
法王による新型コロナウイルスへの対応
／山口英雄 10
- ・ 思案・試案・私案
「碑」の字表記問題再考 (7)
／八木三郎 11
- ・ おやさと研究所ニュース 12

2020 年度公開教学講座の案内

巻頭言

別席とは

おやさと研究所長 永尾教昭 Noriaki Nagao

別席の話は、本来初めて天理教の信仰に触れる人のための話ではない。しかし、前号で述べたように、現在は事実上これが入信の儀礼のようにになっている。

別席とは本来いかなるものか。これについては、論文「別席について」(中山さとゑ『みちのとも』昭和32年6月号～12月号、天理教道友社)に詳しい。それによると別席制度は1888(明治21)年夏に始まっているが、その目的は「自らの心に本当の教理を治める事」とであるという。そして、教理が治まり、天理教の信仰を生涯通る心が定まった者に、結果として「さづけの理」(病人に対する天理教の救済行為「さづけ」を取り次ぐ資格)が授けられる。このさづけの理を拝戴した者を一般に「ようぼく」と呼び、いわば布教師たる承認を得たと言えるだろう。

当初、別席を受講(一般に「別席を運ぶ」と言う)するには初試験と呼ばれた厳格な試験を通らねばならなかった。試験官は、真柱(記録には「会長様」と記されている)、事務所1人、先生方1人の計3人が立ち会った。先生方というのは、本部員(天理教の最高祭儀である「本づとめ」を勤める者)のことだろう。この試験に通ると、ようやく別席を受講できた。そして9回受講すると、さらに試験があり、それに通った者だけがさづけの理を拝戴することができた。整理すると初試験、別席、試験、本席(さづけの理拝戴)の順序を経ねばならなかった。そのため、途中で脱落する者も決して少なくなく、受講者の3分の2が試験に受からず、さづけの理をもらえないということもあったようだ。

その後、制度が改められ初試験、別席、本席、仮席となり、別席後の試験はなくなった。この仮席とは、さづけの理を頂いた者が、さづけの理の取り次ぎ方、取り次ぎ際の心構えなどについて3人の本

部員から教えられるものである。いずれにしろ、厳しい試験を通過して初めて別席を受講できたのである。確かに今でも別席話の冒頭では、国々所々で教理を聞いて納得した上で、さらに教理を深めたいから来たのであろうということが述べられる。つまり教理にある程度精通した者が受講したのだ。

その後幾度かの変遷を経て、現在は初試験に代わり「お誓い」となり、その気があれば誰でも別席を受講することができるようになった。このように変化していった一つの理由は、安易に流されたというより、むしろ教勢の進展であったと思う。天理教の信仰を求める人が著しく増えていく中で、布教師の側も改まってじっくりと教理を伝えるよりも、まず、ぢばに帰り別席を、ということになっていったのではないか。同論文の中で著者自身も「たすかって頂きたい故に、別席を運んで頂くのでありますから、当然その方は、お道には未知なのであります」と初心者が別席を受講すると述べている。

ただ、率直に言って初めて教理を聞く者にとっては、内容が高度すぎる。それでも今は、本部や教会で開催される各種講習会、行事や出版物を通して、あるいは教会長などのフォローで教理の理解を深めていっている。結果、別席受講がすなわち入信のための儀礼のような形になっていったと思う。

ただ国内の場合は交通機関も発達し、初心者にとってもそれほど高い壁ではない。しかし、海外の者にとっては、たとえば航空機の運賃が安くなってきたとはいえ、まだまだ異国、異文化圏に行くという精神的な壁もあり、いきなり初心者に、ぢばに帰り別席を運ぶことを勧めることは現実的ではない。そこで工夫がいると思うのだ。